

## 『敕撰三漢詩集』 典據・出典考

——『文華秀麗集』所收「奉和春閨怨」詩を例として——

半 谷 芳 文

# 前言

『文華秀麗集』には「奉和春閨怨」詩三篇——征夫思婦の心情と姿體を詠ずるが、中國閨怨詩とは抒情的特質をやや異にする平安朝嵯峨弘仁期の佳作——が収められている。この長篇の作品は構想から詩體・語彙、そして内容に關するまで明確に先行作品の享受と選擇（排除）の跡を指摘できる作品であった。前稿ではそれらの問題のいくつかを、抒情的特質を明らかにするという觀點から考察し、そのなかで典據・出典に關しても言及している。

ところで本朝の敕撰三漢詩集の作品に對する。典據・出典の解明については、既に小島憲之氏の語彙を中心とした精確で膨大な成果が示されている。<sup>(2)</sup>それはこの「奉和春閨怨」詩

三篇でも同じなのだが、やはり檢索から漏れた例も見られるようである。また小島氏は、當時享受された諸作品を中唐期ごろまでと述べていても、<sup>(3)</sup>實際の檢索では初唐期までの作品に主眼を置いているのではないだろうか。さらに疑問なのは、出典および先行作品の享受の形態を、ほとんど類書『藝文類聚』に限定しがちなのではないか、と思われることである。そこでこの稿では前稿では扱えなかったやや複雑な例を取りあげ、具體的な典據・出典の解明を通して、右の問題に對して小考を述べてみたい。

## (一)

鹿取の作品の第三段には、次の一聯がある。<sup>(4)</sup>  
似登隴首腸已絕、非入楚宮腰忽細。

(隴首に登るに似て 腸已に絶え、楚宮に入るに非ざるに 腰忽ち細し。)

本聯上句の典據となった作品は、『藝文類聚』にも收められている(後述)。それをここで取り上げることとは、本論の目的から半ばそれてしまうが、管見ではこの句中の語の典故が正しく指摘されておらず、それ故この句の解釋と抒情の解明に曖昧さが残されているという理由により、ここで取りあげることにした。

まず出典の確認から始めよう。上句は、『藝文類聚』卷三十二「閨情」隋江總の詩に依據して、制作されたものである。う。

#### 姮人怨 江總

天寒海水慣相知、空牀明月不相宜。庭中芳桂憔悴葉、井上疎桐零落枝。寒燈作花羞夜短、霜雁多情恆結伴。非爲隴水望秦川、直置思君腸自斷。(點線部「隴水に秦川を望む爲に非ず、直だ君を思ふが置めに腸已に断てり」)

右の詩の最終聯が鹿取當該句の典據となっていることを、用語と内容の両面から確かめておきたい。

『敕撰三漢詩集』典據・出典考(半谷)

まず用語から見てゆこう。

似登隴首腸已絶、  
非爲隴水望秦川、直置思君腸自斷。  
(鹿取「春閨怨」)  
(江總「姮人怨」)

この江總の作品以外にも類似する語句を使用する詩はいくつか見られるが、表現や發想の共通性から判斷すれば、鹿取詩の典據は、明らかに江總の詩である。

次に内容の面からやや詳しく見てゆこう。

まず當該句・聯の表現や發想に關して留意すべき點は、「隴首」(鹿取)「隴水」(江總)という、「隴頭」とはば共通する詩的イメージを喚び覺ます詩跡名を用いて、表現していることである。(そこに着想の妙味もある。)それでは「隴頭」とは、どのような詩情を刻みつけてきた詩跡なのであろうか。それを最も端的に示す作品が、魏末晉初に横吹曲の一つとなり、梁・陳で演奏された「隴頭歌辭」三曲および「隴頭流水歌辭」三曲である。そのなかから鹿取の句に關わりの深い「隴頭歌辭」第三曲を例に挙げよう。<sup>(10)</sup>

隴頭流水、鳴聲幽咽。遙望秦川、心肝斷絶。

## 中國詩文論叢 第二十一集

（隴頭の流水、鳴聲幽咽す。遙かに秦川を望めば、心肝斷絶す。）

「隴頭」とは、現在の陝西・甘肅兩省の省境、いわゆる邊塞の地にある隴山、またはその頂きを指し、「隴首」とも言う。また「隴水」とは、歌辭のなかに見えた隴山の頂き付近に發して流れ下る谷川のことである。この歌辭の大意は、  
 “隴山の頂き付近に發する谷川は、かすかに咽びなきつつ流れ下る。行人（多くは西征の兵士）がこの水音を聞きながら東のかた故郷長安をながめやれば、殘して來た家族や故郷のことが思い起こされて切なくなり、腸がちぎれそうになる。”  
 というものである。つまり、他の歌辭からも補ってこの詩跡（詩語）の喚起する詩的イメージ（本意）を探ると、それは、行人が抱いた激しく切ない望郷の念（「隴水」では斷腸のイメージと特に結びつく）、と言ふことができよう。<sup>(11)</sup> しかもこの詩跡は、單に邊塞詩のなかにのみ詠みこまれるだけでなく、同時に閨怨詩のなかにも取りあげられてゆく。それは、邊塞詩にあっては閨怨詩的素材が、閨怨詩にあっては邊塞詩的素材が、それぞれの抒情をよりいっそう深化させるという、相互依存の行なわれやすい關係にあるからであつた。<sup>(12)</sup> このため本朝「春閨怨」詩にも詩材の一つとして詠じられているのであり、

それは本詩——征夫を愛慕する女の怨み——の抒情に、適確に則した典故の用い方である、と言えよう。

次にいくつか唐代あたりまでの例を示しておく。

……去歲征人還、流傳舊相識。聞君上隴時、東望久歎息。  
 ……

西征登隴首 東望不見家……

「雜曲」沈約『玉臺新詠』卷五  
 紅妝樓上歇、白髮隴頭新……「倡婦行」李嶠『玉臺後集』

……聞道還家未有期、誰憐登隴不勝悲

「擣衣篇」劉希夷『搜玉小集』

……棄妾頻登隴、從軍幾度遼……

「春日代情人」董思恭『玉臺後集』

以上、明らかにした典故「隴首」の内容をふまえて、曖昧であつた鹿取當該句の大意を記しておこう。

出征した夫への想いは激しく募り、それはあたかも征夫がかの隴山の頂きに登り、振りかえつて故郷・妻子を懷しんで腸がちぎれそうになると同じように、切ないものだ。

すなわち、江總の聯を参照した鹿取の句は、征夫への愛慕の痛切さを、詩跡「隴首」の詩情——征夫が斷腸の思いで抱く切ない望郷の念——を用いて、表現したものである。

## (二)

次に前章で見てきた聯の下句、

非入楚宮腰忽細

について考えてみたい。この句の内容は、小島氏も指摘しているように、楚の靈王が細腰の女を偏愛した故事によった表現である。この故事はすでに『懷風藻』荊助仁「詠美人」に「腰逐楚王細、體隨漢帝飛」(腰は楚王に逐ひて細く、體は漢帝に隨ひて飛ぶ)と詠まれており、本朝の人々も早くから周知の閨怨詩における表現素材であった。だがここで留意したいのは、鹿取の句の表現の組み立て方(發想)である。次の六朝・唐代における用例を見てみよう。

……是妾愁成瘦、非君重細腰  
(是れ妾<sup>わね</sup> 愁へて瘦を成せり、君が細腰を重んずるには非ず。)

『敕撰三漢詩集』典據・出典考(半谷)

「爲人寵姬有怨」王僧孺『玉臺新詠』卷六

……纖腰非學楚、寬帶爲思君。  
(纖腰は 楚を學ぶに非ず、寬帶は 君を思ふが爲なり。)

……君戀京師久留滯、妾怨高樓積年歲。  
「詠柏複」蕭麟『玉臺新詠』卷十  
宮、直爲相思腰轉細……

(君は京師に戀して 久しく留滯し、妾は高樓に怨んで 年歲を積む。曾て楚王の宮に入るに關せるに非ず、直だ相ひ思ふが爲に腰轉<sup>うた</sup>た細し。)

「夏日閨怨」蔡瓊『玉臺後集』

以上の例に共通する發想は、楚の靈王の故事を反轉させて「妾」の閨情の深切さを述べている點である。その發想が鹿取の場合も同じなのである。そして、これらは三首とも『藝文類聚』には收められてはいない。そのなかでも發想および文字表現がとりわけ類似している蔡瓊の作品は、現存文獻では、天寶年間以後に成る李康成編『玉臺後集』にのみ收められている。ちなみに蔡瓊は玄宗の天寶年間以前の人。この詩一首を残すのみである。

## (11)

次に菅原清公「春閨怨」詩から一例とりあげたい。

庭前見舞鸞常顧、樓上吹簫鳳未臻。

(庭前に舞ふを見れば 鸞常に顧み、樓上に簫を吹くも 鳳未だ臻らず。)

この聯はおもに下句の内容からみて『列仙傳』「蕭史」<sup>(14)</sup>を典故とした表現であることがわかる。まず最初にこの「蕭史」の故事が、どのように受容されたのかを検討してみたい。この故事は『藝文類聚』『初學記』にも收録されている。しかし、例えば『文選』卷二十八鮑照「升天行」の「鳳臺無還駕、簫管有遺聲」、あるいは同卷三十一江淹「班婕妤詠扇」の「畫作秦王女、乘鸞向煙霧」の李善注に、『列仙傳』「蕭史」を抄出していることは見過しにはできない。平安朝初頭の詩人たちには、類書よりも『文選』がさらに身近な集であったはずだからである。また當時、はなはだ愛好され『文選』とともに愛讀されていた『玉臺新詠』、その巻五にも前記の江淹「班婕妤詠扇」が収められている。すでにこれらの點から

みただけでも、特定の書に限った受容を想定することは困難であろう。

ところで當時、詩賦の典故となる故事が、書卷以外の形態で受容される場合はなかったのであろうか。前記『文選』所收の江淹の作品について、さらにその詩題「班婕妤詠扇」と本文「畫作秦王女、乘鸞向紫煙。」に注目してみたい。これは扇面の繪を見て詠じたものであり、扇に「蕭史」故事の繪が畫かれていたのである(しかも蕭史ではなく弄玉が取りあげられている點も、後述する内容から留意しておきたい)。ところで本朝に同じような例はないのであろうか。まず『萬葉集』のなかには、神仙や道士を描いた屏風があったことを示す歌がある。降って敕撰三漢詩集の作品のなかにも、中國の老莊神仙世界を描いた山水壁畫があったことを示す作品がある。それらは當時畫題としても中國の神仙譚の世界が好まれていたことを示している。<sup>(15)</sup>とすれば、この著名な「蕭史」の神仙譚を畫題にした壁畫や屏風が、本朝にあったとしても別に不思議ではない。そしてそれらの繪を媒介として、あるいは書卷による受容と並んでこの故事が廣く知られていたという可能性も、敢えて否定できないのではなからうか。

さらにもう一つ推察を述べておきたい。鹿取・清公は延暦二十三年（八〇四）に渡唐している<sup>(17)</sup>。その際に彼等が滞在した都長安の西南約六十kmにある、あの「長恨歌」を生んだ場所としても知られる仙遊寺の「弄玉祠」——弄玉にちなんだ當時の著名な詩跡——を見聞する機会を持っていたかも知れない。

このように考えてくると「蕭史」の故事は、各々の可能性自體に大きな高低はあるにしても、種々の享受形態を想定させる適例ではないだろうか<sup>(18)</sup>。むしろ書卷による方法が第一義的ではあろう。しかしそれは少なくとも一類書に限定されて學ばれたものでないことだけは、明らかである。

#### (四)

次に當該聯の内容を典故を中心にして読み解いてゆき、本来この聯のもつ抒情の解明にまで言及してみたい。

そのまゝに、「蕭史」の故事を典故にふまえた詩賦を解釋する場合、注意すべき點を述べておこう。まず、この「蕭史」の故事とは神仙昇天譚であり、また古代の幸福な戀愛譚でもあった。そのためであらう、この故事自體が詠作の對象とな<sup>(19)</sup>てゆく。それと同時に他方では至福戀愛譚という性格から、

『敕撰三漢詩集』典據・出典考（半合）

閨怨詩を中心に多くの詩のモチーフの一つとして詠み込まれてゆく。それ故に本朝「春閨怨」詩にも詠じられているのである。さらに、この幸福な結末をもつ古代の登仙戀愛譚に對して、後世人々が憧憬の念を抱き深めていった<sup>(20)</sup>ことも重要である。こうした關心を背景として、蕭史・弄玉が高貴な男・女、あるいは美男・美女として、また二人の結婚が幸せて圓滿な理想的婚姻として、詩賦のなかに喩えられ詠作されていったのである<sup>(21)</sup>。このような諸點に留意しながら、清公の當該聯を読み解いてゆこう。

便宜上、清公の當該聯を再び記しておく。

庭前見舞鸞常顧、樓上吹簫鳳未臻。

最初に上句「庭前見舞」の「見」・下句「樓上吹簫」の「吹」の行爲者が誰であるのかの検討から始めたい。考察の都合上、下句から考えてゆく。典故となっている『列仙傳』「蕭史」の記事（注14参照）からみて、まず蕭史と弄玉の二人が想起されよう。だがこの「春閨怨」詩——作者が設定した三人稱的人物「女」の臺詞獨白體<sup>(22)</sup>——のなかでは、それが「女」、しかも弄玉に喩えられた「女」であることが、おのず

## 中國詩文論叢 第二十一集

から明らかになるだろう。次にもどって上句の「見」について検討しよう。小島氏の注には、「庭前の舞、樓上の簫は彼女の藝であり」、と記してある。「彼女」とは前述の「女」を指すのであろう。それ故小島氏は上句「見」の行爲者を「女」と解釋してはいないことがわかる。しかしやはりこの行爲者も「女」であると解釋するのが、妥當であらう。なぜならば、對偶をつくる下句「樓上吹簫」の「吹」の行爲者が、前記のように「女」であつたからである。むしろそう解釋することにより、(歌)舞が「女」の伎藝でなくなることにはならない。むしろ上句でさらに重要なのは、佳人(「女」と(歌)舞が結びつけられていることである。これは決して無作爲に表現した結果ではない。小島氏は指摘していないが、この表現は、「趙飛燕」の故事——例えば「及壯、屬陽阿主家、學歌舞」、號曰「飛燕」(師古注曰、以其體輕故也)、『漢書』九十七下「外戚傳」——を典故とした表現であらう。つまり清公の當該聯には、歌舞に巧みで細身の輕やかな身のこなしをする趙飛燕、また蕭史と結ばれ理想的な婚姻をし、そのうえ登仙するという幸せで美しい弄玉、その二人のイメージが「女」に託されているのである。加えて次の點にも注目しておきたい。それはこの「春閨怨」詩冒頭の段——婚姻前の

「女」の華やかさ、艶やかさを詠じている場面——に、弄玉の故事を用いている點である。ここに予期された「女」の幸福な行く末と、この作品の後半の「女」の不幸——孤閨に苦しみ容色の衰えにおののきながら夫の歸りを待ちわびる——とが、前後鋭い對照をなしているからである。このような觀點からみると、清公のこの聯が秀逸なものであると理解できよう。

ところで、この清公の表現にも當時の他の多くの作品に見られるように、典據となつた先行作品を指摘することができ。それは『藝文類聚』所引の作品ではなく、初唐四傑の一人盧照隣「長安古意」のなかの次の一聯である。

借問吹簫向紫煙、曾經學舞度芳年。

(簫を吹いて紫煙に向ふひとに借問すれば、曾經て舞を學んで芳年を度る、と。)

この聯における典故の用い方——上句に「弄玉」、下句に「趙飛燕」を用いる。清公の聯の順序とは逆——は、清公の場合と基本的に變りがない。清公が「蕭史」を典故としたいくつかの作品を鑑賞するなかで、とりわけこの「長安古意」

から影響を受けたことは、その典故の用い方の類似性からも、明らかである。しかしながら、清公の聯も盧照隣の場合と同じく、その作品のなかでこの典故を用いた表現が表現意圖に適確に即しており、決して凡庸なものとはなっていない。

ちなみにある先行作品を参照して類似した表現を行なうこととそれ自體が、そのまま否定的な評價に結びつくものかどうかは、その都度慎重に検討しなければならない。特に南朝から初唐あたりまでの作品間における類似表現の關係を想起するとき、敕撰三漢詩集にも見られる先行作品と類似する表現を、今日的視點からのみ評價することはできないであろう。

## (五)

次に巨勢識人の「春閨怨」詩からその最終聯をとりあげて、その典據を明らかにしてゆきたい。

片時枕上夢中意、幾度往還塞外途。

(片時枕上 夢中に意<sup>おも</sup>ふ、幾度か、塞外の途を往還するを)

この最終聯は、<sup>メ</sup>女が良人への思慕がつのるなか、現實にはほとんど期待できない再會を願うあまり、せめて夢のなかで良人のいる塞外の地へ通い、ひとときの逢瀬を果たす、という内容である。このように孤閨の哀切さを描くために、

『敕撰三漢詩集』典據・出典考(半合)

夢中での征夫との往還や邂逅を詠じる表現手法は、六朝期にはじまり、唐代にも閨怨詩を中心にしばしば見られる趣向であった。(ただし、これがやや常套的な手法であることから、この作品の抒情も平凡であると見なすのは、おそらく妥當ではない。)いくつか用例をあげておこう。

……幾回明月夜、飛夢到郎邊。

「閨思」范雲

その他、梁・沈約「夢見美人」(『玉臺新詠』卷五。)などもある。

……昨來頻夢見、夫婿來應知。

「閨情」王諱『國秀集』卷下

……已成殘夢隨君去、猶有驚鳥半夜啼。

「佳人贈別」顧況『御覽詩』

右の例のように思婦が夢に征夫に逢うという表現は、多くの詩に見られる。しかし識人の當該聯は、これらのなかでも次の盛唐の岑參の作品を典據としたものであろう。

春夢



## 中國詩文論叢 第二十一集

洞房昨夜春風起、遙憶美人湘江水。枕上片時春夢中、行盡江南數千里。

(洞房昨夜 春風起こり、遙かに美人を憶ふ 湘江の水。枕上片時 春夢の中、行き盡くす江南 數千里。)

この岑參の七言絶句の轉・結兩句が、久しく逢えない人と夢のなかに通い會うという同じ趣向であること、また措辭や表現内容が多く一致することから判斷して、鹿取の當該聯が依據した先行作品と見なしてよい。<sup>(25)</sup>

右の詩は、『河岳英靈集』に(『才調集』にも)收められている。『河岳英靈集』は、周知のごとく序文を『文鏡秘府論』「南」卷に全文載せるように、平安朝初頭の詩人たちにも身近な總集の一つであった。これらのことは、敕撰三漢詩集の詩人が、盛・中唐期の總集も隨時披見していたことを、確實に示している一例である。

## (六)

以上、「春閨怨」詩三篇から4例とりあげ、それぞれの典故となった先行作品の説明を中心として、そこに本來託されている抒情をも探ってきたつもりである。そこで次に典故と

される作品と『藝文類聚』との關係という觀點にしばらく、改めて見解を示しておきたい。

順序が逆行するが、まず巨勢識人——片時枕上夢中意、幾度往還塞外途——から見てゆこう。この聯が盛唐期の岑參「春夢」に依據した表現であることは明らかであり、『藝文類聚』所收の諸作品とは、ほとんど關りが無い。そしてこのことは、盛唐期以降の總集・別集が享受されていたことを如實に示している。<sup>(26)</sup>

次に、菅原清公——庭前見舞鸞常顧、樓上吹簫鳳未臻——は、『列仙傳』「蕭史」という神仙・戀愛譚にもとづいた表現であった。だが、この説話の受容では、小島氏が述べているように『藝文類聚』(『初學記』も含めて)のみを通して享受されていたと考えるならば、實態とは相違していよう。これらの類書を含め、廣く『文選』『玉臺新詠』などからも受容されていたと考えるべきであろう。しかもさらに他の享受形態さえも想定しうる可能性すら、認められるのである。またこの故事への理解とそれにもとづく表現とがほぼ共通する聯を、初唐の盧照隣「長安古意」のなかに見い出すことができる。兩者に見られるこの故事への理解と表現は、おそらく唐代に

入ってからこの説話に付加されていた性格に基づいている。そしてそれは『藝文類聚』所収の隋代までの作品には、ほとんど見られない表現のようである。

朝野鹿取——似登隴首腸已絶、非入楚宮腰忽細——の聯、まずその下句は、楚の靈王が細腰の美女を偏愛した故事による。この故事は、すでに『懷風藻』に用いられており、早くから閨怨詩の素材として知られていた。だがこの下句に見られる發想（表現の組み立て方）は、『懷風藻』でのそれとは異なり、六朝から唐代にかけて共通するやや常套化した表現なのである。この例も單に類書のみを参照するに止まらず、總集・別集を中心に廣く受容していた實態を示す好例となろう。

またこの聯の上句は、江總の作品以外には、同じ發想の表現を認めることができない。しかもこの江總の作品は、平安朝初頭の人々が閲覽できた現存文獻を検討すると、『藝文類聚』卷三十二の他には見あたらない。現存文獻によるかぎり『藝文類聚』を典據としていると考えられよう。しかしより慎重に考察してみると、江總「……隴水望秦川」から當該句「似登隴首……」と表現するに至る間には、二つの表現をつなぐ、この詩跡に關する様々な理解が必要であつたはずである。それを『藝文類聚』各卷に點在する作品を通して行なう

ことは、不可能ではないにしても大きな困難が想定されよう。ちなみに、詩跡「隴頭」に關する源泉的作品である前記の「隴頭歌辭」第三曲は、じつは『藝文類聚』のなかには収められていないのである。

以上、「春閨怨」詩各篇からわずかに四例のみを検討した段階で、敕撰三漢詩集全體にわたる典故の傾向を論じることにはむずかしい。しかし「春閨怨」詩三篇にかぎっていえば、先行作品の享受と作品の制作に關して、小島憲之氏が指摘するように『藝文類聚』の範圍に限定できるものではないであろう。

## (七)

さらに敢えて述べれば、『藝文類聚』が先行作品の享受と詩文制作の兩面において、他に優先して利用されていたという前提を、小島氏は抱いていたのではないだろうか。以下に示す享受上の實態や推定も加わえてゆくと、やはり小島氏の姿勢に疑念を抱かざるをえない。

一つは、當時の書物が卷子本であつたことに起因する問題である。むろん類書も例外ではない。それを讀むには冊子本の比ではない手間がかかり、また利用したい記事が一巻のな

## 中國詩文論叢 第二十一集

かに備わっているのは、むしろ稀なことではなかったのか。それ故に、ある作品の典據がたとえ『藝文類聚』に指摘される場合であっても、それらが各巻に散在しているならば、かえって他の集からも受容されていたのではなかったかと、疑問を抱くのである。

もう一つは、前の推察を補足することにもなるが、當時披見されていたもので、しかも現存する集や書のなかに典據を求めた場合、『藝文類聚』のなかに他より多く見い出せるのは、次のような理由も関わっているのではなからうか。それは、敕撰三漢詩集の詩人たちの表現の場——ほとんど「晴」公的なものと考えてよい——に希求された表現内容、それと最も近似する性質をもった作品を、現存する文獻のなかで最も多く収載しているのが、ほかならぬ『藝文類聚』百巻ではないのか。例えば、當時の詩人が或る集の某作品を典據として詩を制作したとしよう。同時に某作品は『藝文類聚』のなかにも収められていた。しかし現在或る集は亡佚してしまっている<sup>(27)</sup>。そういう状況を稀なものであると、果して見なせるであらうか。

こうした諸點も考えあわせると、やはり次のような見解を抱かざるを得ない。『藝文類聚』百巻は、その所引する作品

の性格と収載量の多さにより、當時傳來していた他の集に比べて、享受と實作の両面で頻繁に利用されていたであろう。しかし、それが小島憲之氏の指摘するほどの高い比率で利用されていたのかは、なおも疑問なのである。そしてこの問題は、むしろ以下のように觀點を變えたほうがよいであろう。海波の文藝の享受と漢詩文の實作を、ほとんど『藝文類聚』を利用した結果にはかならないとはぼ斷定してしまう前提は、敕撰三漢詩集所收の作品世界を、單なる中國詩家の模倣、あるいは次代の文藝的成果の搖籃という評價に固定しがちな深弁に陥る結果を、自ら招くことになるのではあるまいか。つまり、當時典據した作品が收められた『藝文類聚』以外の總集別集から、他の作品をも合せて享受していたであろう。それにより次第に醸成されていた詩人たちの豐饒な詩的背景を見落したまま、この期の作品を読むことになるのではないだろうか。さしあたって典據の解明に關して言えば、典據と見なされる先行作品が位置する同じ位相に再び本作品も置くことを經て、はじめてその抒情的本質が見えてくる。すなわち少なくとも敕撰三漢詩集における典據の解明とは、作品の抒情的特質に迫るための重要なプロセスとして、改めて位置付け直し、再認識する必要があるのではなからうか。

## 注

- (1) 拙稿『文華秀麗集』『艶情』『春閨怨』詩考」(『函館私學研究紀要』31號、01年)、同『文華秀麗集』『艶情』『春閨怨』詩に關する比較詩學的考察」(『中野幸一教授退職記念論文集』武藏野書院、03年)

- (2) 『上代日本文學と中國文學』上・中・下、『國風暗黒時代の文學』上・中・下、『日本古典文學大系』69など。

- (3) 例えば小島憲之氏は、『奉和春閨怨』詩の作者である清公・鹿取は)第十六次遣唐使(延暦二十四年805歸朝)に隨行した點よりみて、唐詩に接する機會にも恵まれ、平安初頭歸朝の第一便として數多くの漢籍をも平安の都にもたらしたものとと思われる」と述べている。『上代日本文學と中國文學』下』一六一九〜二〇頁、塙書房 65年) この指摘は中唐期までの漢籍に對する見解と見なされよう。

- (4) 本文と試訓は『文華秀麗集』(『日本古典文學大系』69所收)、注(1) 拙稿を參照されたい。

- (5) 注2 前書一六三二頁には、『悲しみのために隴山(陝西省の西北、甘肅省にまたがる國境附近の山)の頂上に登る時のやうに腸もすっかりたち切られるほどであり』と述べる。しかしここには隴山に登るとなぜ悲しいのかをはじめ、典故が明らかにされていない。また、『文華秀麗集』(日本古典文學大系69所收)一三四・五番の詩の頭注・補注、『國風暗黒時代の文學』下Ⅱ(塙書房、95年)三五五八頁以下における

『敕撰三漢詩集』典據・出典考(半谷)

「隴頭」その他に關する記述にも、この地と郷愁との關係が全く説明されていない。

- (6) ここに所引の詩は、すでに邊欽立氏『先秦漢魏晉南北朝詩』に指摘されているように、「姫人怨」・「姫人怨服散」の二首が後者の題のもとに一首として收載されている。そこで當該句の典故と見なされる前者のみを記す。また第一句「慣」は未詳。

- (7) 最終聯下句「直置」は、王雲路氏『六朝詩歌語詞研究』(黑龍江教育出版社、99年) 三六八頁に「猶言只因、只因爲」とある指摘に従う。「ただ」のために(原因、理由)を表わす。

- (8) 中國古典詩の分野で用いられはじめた、我國の歌枕・俳枕と類似した概念をもつ詩學用語。「中國の『詩跡』は、單なる地名ではなく、長いあいだ詠みつがれ、愛誦・流布されてきた古典詩のなかに出現して、ある特定の傳統的な詩情やイメージを豊かにたたえた、各地に實在する具體的な場所(いづれも固有名詞に屬し、我が國の歌枕・俳枕と同様に、宮殿・高樓・橋・亭・關所・祠廟・舊宅・寺院・墳墓などの人工物も含まれる)をいう。この詩跡は、いわばすぐれた詩人たちの詩心の傳統を、ふくよかにやどす聖地であり、當地獨特の地理的空間や自然景觀だけでなく、代々その土地に刻みつけられ、託されてきた豊かな詩情と長い風雅の傳統を強く喚び

## 中國詩文論叢 第二十一集

さます連想機能を持つている。」植木久行氏「中國における『詩跡』の存在とその概念」(『村山吉廣教授古稀記念中國古典學論集』、汲古書院00年)。また『漢詩の事典』第三章「名詩のふるさと(詩跡)」(植木久行氏擔當、大修館書店、99年)には、現在までの研究成果をふまえた總論・具體例が豊富に示されている。

- (9) 増田清秀氏「南朝人作の横吹曲辭」(『樂府の歴史的研究』、創文社、75年)。

- (10) 他の二曲も記しておく。

隴頭流水、流離山下。念吾一身、飄然曠野。  
朝發欣城、暮宿隴頭。寒不能語、舌卷入喉。

- (11) このイメージの背景には、この土地が古來、漢民族と異民族の境界、言い換えれば、そこを過ぎれば夫と妻子(故郷)が——少なくとも心理的には——斷絶する地、そして異民族との防備・戦闘の地という認識があったことも、見逃せない。

(前掲『漢詩の事典』五〇一頁参照。植木久行氏擔當。)

- (12) 松浦友久氏「邊塞」と『閨怨』を結ぶもの(『中國詩歌原論』、大修館書店、86年)。そのなかで例えば『兵士の望郷の念いの中核たる閨中の妻』と『空間の嘆きの要因たる邊境の防備』という關係」と指摘している。

- (13) 『懷風藻』(『日本古典文學大系』69所收) 一〇二頁。

- (14) 『列仙傳』卷上「蕭史」

蕭史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之。公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴。居數年、吹似鳳聲。鳳凰來止其屋。公爲作鳳臺、夫婦止其上、不下數年、一日皆隨鳳凰飛去。故秦人爲作鳳女祠於雍宮中、時有簫聲而已。

- (15) 藏中のぶ氏「題畫詩の發生」(『國語と國文學』、88年)。ここに所引の小島憲之・川口久雄・後藤昭雄各氏の論考。

- (16) 注15参照。

- (17) 延暦二十三(八〇四)の遣唐使一行が、詩賦への認識を一變させられた在唐體驗については、拙稿「『文華秀麗集』の位相」Ⅱ(四)(『中國詩文論叢』十七集、98年)を参照されたい。

- (18) さらに、諸典籍に付けられた注、その注に所引の記事や詩賦によっても、先行作品を含む様々な内容が享受されていた、と充分に想定しうるであろう。例えば舶載後約百年を経ても當時甚だ愛讀されていた『遊仙窟』、いま元亨元年(一二三一年)の奥書をもつ金剛寺本『遊仙窟』(東野治之編、塙書房、00年)の注を見みると、ここで取りあげている『列仙傳』「蕭史」の記事(同書、四十頁・圖11)、および『文選』『玉臺新詠』所收の梁江淹「班婕妤詠扇(ただし梁何遜「擬班婕妤詩」として。同書、一二四頁・圖53)が、引用されて

いるのである。金剛寺本『遊仙窟』は「現存最古の寫本」  
 「金剛寺本の文が古い姿を傳えている」という見解（東野治之氏「金剛寺本『遊仙窟』について」同書、三頁～十三頁）もあり、平安朝初頭に付けられた注をそのまま踏襲して傳えている可能性も、高いのではあるまいか。いま「蕭史・弄玉」の故事やそれに關わる詩賦が、當時の『遊仙窟』の注に引用されていたか否かはひとまず置くとしても、漢籍に付けられた注に引用された記事、詩賦を通して、先行作品が享受された可能性が高いことは、十分に銘記しなければなるまい。

(19) この一例として「蕭史曲」の題をもつ樂府——鮑照・張融・江總・沈佺期・曹唐——をあげることができよう。

(20) それを示す典型的な例が『太平廣記』卷四「蕭史」（『神仙傳拾遺』の次の記事。『列仙傳』には見られず、後世付加されたと考えられる部分のみを示す。

蕭史不知得道年代。貌如二十許人。善吹簫作鸞鳳之響。而瓊姿煒燁、風神超邁、眞天人也。……弄玉乘鳳、蕭史乘龍、昇天而去。……

(21) その例として後述する盧照隣の詩もあるが、典型的な作品として、魚玄機「送別」（二首其一）をあげておく。また、『全唐詩典故辭典』「吹簫」（湖北辭書出版社、89年）の條も参照されたい。

(22) 詳しくは注1の拙稿参照。

『敕撰三漢詩集』典據・出典考（半谷）

(23) 注2前書下卷一六二頁。

(24) 當該聯の下句中「……鳳未臻」に對して、小島憲之氏の推察「この記事を逆用したものとみて、まだ結婚しないことを意味するものとみてよからう」は、この故事に對する唐代の關心をもとにして考えると、妥當であろう。

(25) 岑參「春夢」では、誰が夢を見ているのか、またその夢の對象「美人」とは誰なのか、しばしば論議されてきた（『續校注 唐詩解釋辭典』増子和男氏擔當「岑參」參照。「大修館書店、01年」）。この「春閨怨」詩では「春夢」を、女が思慕する男性を夢みる詩と解釋して、典據としていることがわかる。これは中國の傳統的解釋とは相違する解釋であり、その背景には文學的風土・傳統の差異があるであろう（參考、植木久行氏『唐詩物語』「清純な愛の物語——趙嘏」。『大修館書店、02年』）。

(26) 盛・中唐期の總集・別集の受容については、注17拙稿、「Ⅲ（四）」をも参照されたい。

(27) 例えば『日本國見在書目錄』卷三十九別集家・四十總集家を見れば、現存しない集が相當數あることがわかる。むしろそれら全てが參看されていたわけでもないだろう。

函館大學付屬柏稜高等學校教諭